

2. アルファーマ暮色

まずはリスボンの町を見下ろすことのできる丘の上を目指すことにした。そこからアルファーマを見下ろそうと思ったのだ。ルイス・デ・アルメイダはアルファーマで生まれ育った。彼の生地にも足を踏み入れる前に、まず全体の姿を頭に入れておきたかった。

リスボンは7つの丘に囲まれているといわれている。「7つの丘」と聞いて、ピンと来る人は相当な世界史通である。「カピトウ・ムンディ＝世界の首都」のローマにも7つの丘がある。紀元2世紀にローマに征服され、属国ルシタニアとなった時から、ポルトガルのラテン化が始まるのだけど、当時はフェリキタス・ユリアと呼ばれていたリスボンの町が、テージョ河という天然の良港のお蔭で、次第に交易の中心地として重要度を増していったらしい。遠いローマを遙かに偲び、あるいは想像する中で、ローマを取り囲んでいる7つの丘を、自分たちの町にもなぞらえようとする人情は分かる気がする。つまり、リスボンは古代ヨーロッパ社会における「小京都」ならぬ「小ローマ」というわけだ。

フィゲイラ広場からタクシーで、リスボンを取り巻く7つの丘の一つセニョーラ・ド・モンテ展望台を目指すことにした。そこは名前（セニョーラ・ド・モンテとは山の上のマリア様という意）の通りマリア像のある展望台で、木陰も涼やかな素適な場所だったが、リスボンの中心地側は見下ろせても、アルファーマは見えない。東南側に少し下ったところにあるグラッサ展望台まで歩いて降りてみたが、ここからもアルファーマは見えなかった。さらに東南側に下ったサン・ジョルジュ城からもアルファーマは見えない。さらに下ってサンタ・ルジア展望台まできて、ようやくアルファーマの真上に出た。

18世紀に再建された中心市街地と違って、アルファーマを見下ろすとヨーロッパの古い街並みとは全く違う、異様ともいえる薨の波が犇めいていた。リスボンを襲った未曾有の大地震の時、地盤が固かったのだろうかアルファーマは壊滅を免れた。そのため、アラブ人の支配当時の街並みの雰囲気をそのまま色濃く残し、河岸から一気に丘の高みに登る斜面を迷路のような狭い路地と、石造りの建物が犇めくように薨を並べているのだ。

下りだけとはいえ真夏のリスボンの丘を歩いて廻ったせいか、腹時計が一足先に時差ぼけを修正して、正確に昼飯を要求している。そのままアルファーマの町まで歩いて下ることは諦めて、リスボン名物の路面電車にのって昼食に行くことにする。

すると初めて乗った路面電車で、もう一つのリスボン名物に遭遇してしまった。車内スリのターゲットになったのだ。わたしには外国人観光客風の若い男が二人がかりで、妻の方には地元住まい風の女が一人、それほど混んでいないのに不自然に体を押し付けてくる。わたしは胸ポケットのファスナーに手を入れられたところで、外からその手を叩いた。妻の方は声を上げたが、乗り合わせている客たちは素知らぬ顔をしていた。いつも同じ路線を使う地元の人にしてみれば、目をつけられて後で仕返しされるのを恐れているのだろうが、ブラジルでも周りの人間が気が付いて知らぬ顔をすることはない。

ともあれ慌てて予定の電停より一つ手前でおりて、実害もなく無事に逃れることだけはできた。スリたちはポルトガル人ではないらしいが、ヨーロッパのどこに行ってもいる街中の犯罪集団のルーツが、実はヨーロッパの歴史上の人種差別や宗教偏見に根差していることを思い合せて、暗澹たる思いにさせられた。電停から河岸に向かって繁華街を少し歩いて、トレイロ・ド・パツに続くコメルシオ広場に出る。そこには大地震まで、ポルトガ

ルの王宮があったところで、アルメイダもここで医師免許状を授与されている。

正午過ぎの暑い時間を船でテージョ川に遊び、一度市街地の中心シアードの高台まで行って昼食をとり、サン・ロッセ修道院跡の宗教博物館見学などでやり過ごして、再びアルファーマまで戻ることにする。今度は河岸に沿った道から、坂や階段を上ってアルファーマの狭い迷路のような路地の真只中に入り込んだ。時間は夕方から宵の口になっているのだが、それでも路地とその両側に迫る石造りの古い建物によって、細く切り刻まれた空はどこまでも青く澄んだ色をしている。

結局、この日はアルメイダの生地であるジュリジアーノ街は見つけることはできなかったが、路地の底にトワイライトが蹲る中、そこそこに佇んでいる地元の老女達や、歓声を上げて走り回る子ども達の姿に、アルメイダの時代の面影を追いかけてみた。



サン・ジョルジュ城からも、アルファーマは見えなかったけれど、アルメイダの学んでいた医学校前のフィゲイラ広場は手に取るように見える。

リスボンのランドマークは色々あるけれど、この白壁と朱い屋根が何よりの特徴であろう。街並みの向こうには、この町に繁栄をもたらすことになった最初の要因であるテージョ川も見えている。フェニキア時代のころから、この川がなかったら、リスボンも生まれてはいなかっただろう。



サンタ・ルジア教会のすぐ横にある同名の展望台は、アルファーマの真上にあり、屋根に手が届くような間近さに、子どものころのアルメイダの歓声が今にも立ち昇ってきそうな錯覚に襲われた。

家並みの下は迷路のような路地と坂道、階段なのだが、それがまたわたしの旅ごころをくすぐってくれた。ただし、アルメイダの生家のあったジュリジアーノ街という名の路地は、最後の最後まで、見つからなかった。



スリに遭遇する危険性はともかく、狭い坂道を上り下りする路面電車は、ポルトガルの旅情をいやがおうでも高めてくれる。向こう側に車が見えているが、離合できないような場所では、信号で自動車と路面電車が交互通行するようになっている。それにしても、コーヒーを店の外に持ち出して、優雅に新聞を読んでいるお客さんのすぐ横を轟音をとどろかせて、通り過ぎる電車の姿は確かに一見の価値がある